MACHI-KADO

Vol.18 静岡文化情報 街かど

（財）静岡市文化振興財団

秋の寄り道
羽鳥周辺
路地裏散策

特集
木枯の森

Information
（財）静岡市文化振興財団 インフォメーション

静岡市立児童会館
静岡市民ギャラリー
ストリートフェスティバル・イン・シズオカ

羽鳥 あの日 あの時

文：中勘助文学記念館　前田　昇

千代山より羽鳥を望む

藁科川はこどもの楽園だった

少年時代の思い出を語るとき、忘れてはならないのが藁科川である。水遊びに明け暮れた夏休みはもとより、だいらぼうに沈む夕日の美しさ、渇水期の竹馬の川越、偶然見つけたせきれいのたまごなど、四季折々に満ち満ちている。

新間トンネルの竣工で、今では間道になりさがっている新間谷川に木橋がかかっていた。欄干から水面までの高さは5～6m、覗くと体がすくんだ。「下を見ると怖くなるから遠くをみて飛び込め。」ガキ大将に後押しされて飛び込んだ。大成功だ。何回か繰り返すうちに怖さも吹き飛んだ。

ある日は、対岸の南藁科の子供たちと石合戦になった。原因は場所取りだ。当時の藁科川は、今より水かさがあったと思うが、泳ぎに適した淵は限られていた。楽しく泳ぐために場所取りは宿命だった。合戦は命中すると痛いので、常に安全な距離を保って投げ合っていた。けがをした記憶はない。

野草が枯れ始めた晩秋の一日、河川敷を利用した「少年馬事訓練」があった。地区の農耕馬が駆り集められた。日ごと拡大していく戦争に備えての基礎訓練だった。「オーラ、オーラ」と声をかけながら馬に近づくことから始まって、腹の下をくぐったり、片足ずつ持ち上げてひづめの点検をしたり、口輪をはめたりと緊張の連続だった。最後は鞍をつけての乗馬練習だ。早足でコースをまわるまで上達した。

大正の初期か？木造の牧ヶ谷橋のできる以前のものか？

メジロの巣

これは、当時の小学生作文コンクールに入選した私の作文の題である。夏がすぎ、実りの秋が訪れると、子供たちの遊び場は、川から山へと移っていった。そこには、あけびが熟し、山柿が色づき、しば栗が落ちていた。

木の実のなくなった冬のある日、私は水枯れの沢のいずみに鳥もちをしかけた。頃合をみて確かめに行くと、一羽のメジロが、餅に羽をとられてバタバタしていた。急いで剥がそうとしたが、手遅れでまもなく死んでしまった。私は、ひどく心を痛めて、小さな墓を作って両手を合わせた。それから、すべての殺生をやめた。いまでも悔いている。

昭和15年頃の牧ヶ谷橋の下流の土手造りの風景

羽鳥一丁目
後藤温男商店より静岡方面を写す。

昭和10年頃の養魚場の風景

静岡まつりの当番町で服織村より静岡市へおねりが向かう

服織中学校

中勘助さんとの出会い

私が13才の秋であった。県道から見性寺に通ずる参道で、背の高い和服のおじさんに出会った。「あれ、見たことのない人だなあ」と思って後をついていくと本家の前田一夫さん宅に入った。おばさんに聞くと「東京から来た中勘助さんだよ」と教えてくれた。当時の私は、この素敵なおじさんが、名作『銀の匙』の作者であることも知らなかった。ただ、子供心に「上品な人だなあ。きっと偉い人に違いない」と考えていた。

数日後、中さんの所へ新聞を届けたのをきっかけに、遊びに上がるようになった。寡黙な中さんとは対照的に、話上手で気さくな奥さんは、いつ訪ねても優しく応対してくれた。素晴らしい出会いだった。

［中勘助］明治18年東京・神田に生まれ、東京帝国大学卒業後、処女作『銀の匙』を執筆、夏目漱石の絶賛を受け、東京朝日新聞に連載されたことから、作家の道を歩み始めた。また、詩人、随筆家としても知られ、その静かなやさしさの中にも鋭い視点を秘めた作品は、今なお多くのファンをとらえている。昭和18年から病気療養のため4年半の日々を新間・羽鳥で過ごした。

大正末期の牧ヶ谷橋の銭取り所か？

秋の寄り道 羽鳥周辺 路地裏散策

❶酵素藁科

「酵素風呂」って何だろう。あまり耳慣れない言葉に興味をひかれ訪ねてみた。一見、倉庫のような外観だが、一歩踏み入れると、独特のにおいが体を包む。

ここは、体に必要な8,000種類もの酵素を米ぬかに加え、その自然の発酵熱を利用したお風呂である。お風呂といっても砂風呂のようなイメージだ。70℃にもなる米ぬかの中に裸のまま15～20分横たわる。米ぬかなのでチクチクしたりせず肌にも優しい。皮膚からたっぷり酵素を吸収し、体の免疫力を高めるのだ。肌のトラブルを始め、内臓疾患（特に肝臓）や打撲などに効用があるほか、風邪などの予防にも効果があるという。市内だけでなく、県外からもお客さまがくるという。「自然の熱を利用しているため、一日に入れる人数が限られてしまう。電話で予約をしてからお越しいただいた方が確実。病気が治らない、体の疲れが取れないとあきらめている方にぜひ利用していただきたい」とのこと。

酵素の持つ不思議な力で元気な体を蘇らせてみてはいかが…。☎054－278－3777

❷満寿一（ますいち）

さらりとした喉ごしが酒通を唸らせる静岡を代表する地酒「満寿一」。

静岡県内で唯一酒造りの技術を持つ志太杜氏の流れを受け継ぐ。志太杜氏は、昭和初期には30件あまりのメーカーがあり、約800名の造り手集団として最盛期を迎えていた。しかし、平成元年に最後の杜氏が2人となり解散。その後、満寿一の蔵だけが志太杜氏の伝統を守ってきた。その満寿一も、最後の蔵人が昨シーズンをもって引退。今年の冬から新しいメンバーで酒造りに取り組む。

酒造りはとても繊細な作業。精米から始まり、もろみを作り清酒になるまで、きめ細やかな心配りが必要となる。精米は米の原型を崩さないよう60～70時間もかけて少しずつ行う。麹の植え付けは、雑菌が入らないよう十分に注意しながら室温35～40℃の中で行われる過酷な作業だ。酒造りにおけるポイントに水と温度がある。より良い酒造りを目指して明治末期にこの地に移転しただけあり、安倍川の伏流水は甘くさらりとしていて、満寿一の美味しさの原点が伺える。もろみの適温は5℃と低いため、暖かい静岡では、温度管理が一番気を使う点だという。現在の仕込み蔵も吟醸蔵も大正末期に冷却効果を上げるために造られたもので、特に鉄筋造りの仕込み蔵は、当時では大変珍しいものである。より美味しいお酒を造りたいという当主の熱意がここにも感じられよう。

「楽しく飲んでもらうために楽しく造りたい」と専務の増井さん。志太杜氏の伝統を守りつつ、21世紀の新しい酒造りを目指していきたいと熱く語ってくれた。

❸南無延命地蔵菩薩

平野雅彦さんとアトム

❹手塚治虫コレクション 平野雅彦さん

手塚治虫に魅せられて、集めたグッズは、4,000点。キャラクターグッズはもちろん、連載当時の本・雑誌、原画、中には他人の家の壁から剥がしてきたシールもあるというから、その入れ込みようには、ただ、ただ驚くのみ。その魅力を問えば、「手塚治虫の描く丸味を帯びたラインには、両性具有のエロティシズムを感じる」と言う。そういえば、手塚治虫は対談の中で「アトムはもとは少女だった」と語っているし、手塚治虫が生まれ育ったのは男装の麗人で有名な宝塚歌劇の近くだったというからそれも然り。ただ一般の読者はとてもそこまで思い至らないけれど。

平野雅彦さんは、中学時代300点程集めたコレクションを七夕豪雨で失い、ショックで数年間何も集めることができなかったという。しかし、大学生になり、手塚作品を再読した瞬間、コレクション熱が再燃してしまったのだそうだ。

手塚治虫に「呼ばれてしまった」と笑う平野さんは、自身のコレクションを「数寄（すき）と尽（つ）くし」という言葉で語る。文字どおり「数寄」は、「数を寄せる」つまりコレクションともいえる、また「尽くし」は尽くすこと、全部を与えること。「描かれたライン（すじ）の一部を見れば、手塚治虫のものだと分かる」と言う平野さんは、まさに、心を尽くして数を寄せているのだろう。コレクションもここまで突き詰めるとそれは手塚治虫の世界を通過して平野さんの世界を創り出している気配すらある。1つ集めるごとに平野さんは手塚治虫から何かを受け取り、新しい世界を開いていく。そして、何かを受け取るアンテナは、ただ「数寄＝好き」ということらしい。

●手塚治虫先生のサイン

●けん玉とシャンプー
なかなか珍しいグッズ。

●ウランちゃんのソフトビニール人形
記念すべき初めて入手した手塚グッズ。今や細かなモノまで入れると4000点。

●レオの鉛筆
文具は決まって手塚キャラだった。

●ブリキのUFO
ペコちゃんの人形とトレードして入手した。

●海のトリトンの原画
持っているのは実際に掲載されているページ

❻杉山米店

創業明治10年
小豆や大豆の計り売りもしている。お店の中は古いポスターでいっぱい。

❺磯谷恵一さん 佐紀子さん

「羽鳥周辺を取材するなら、磯谷さんははずせませんよ。」そう言われて伺った磯谷さん宅。客間にあげていただいたくと、そこには教会のフレスコ画と見紛う絵画、ステンドグラス、パイプオルガンが並び、訪れた人を驚かす。この絵画とステンドグラスは磯谷恵一さんが作成、パイプオルガンはスクラップ寸前のものを修復した。

磯谷恵一さん　磯谷佐紀子さん

磯谷さん宅

さらに、磯谷さんの作品は様々あり、「花貝合わせ」は720枚の貝に、360種類の草花が一枚一枚優雅に描かれ、その完璧な仕事ぶりには、驚きを通り越して呆然とさえしてしまう。

お仕事をされている磯谷さんは、これらの作業を「切れ切れの時間」と「若干の工夫」で行ったと、気負った様子もなく語る。その隣で奥様の佐紀子さんはにこにこ笑っている。実は、佐紀子さんも人形作りをされているのだ。佐紀子さんの人形は、古着、端切れのちりめんを使い、丁寧に丁寧に作られている。ねずみのお雛さまや十二支の行列、ホックにちりめんを巻き付けた小さな小さなお雛さまなど、その深い色合いや柔らかい表情、細やかな作りは心に響き、いとおしいほどだ。

恵一さんの作品／花貝合わせ

「物を作ることは楽しい。ただ、商売にならないことをするのは、珍しいことになってしまう」そんな磯谷さんの言葉にはっとさせられる。確かに何かをする時、つい結果や利益を考えてしまうけれど、お二人は作ることの楽しさに魅せられて無心に物を作り続けている。時間も工夫もそうした楽しさの中から生まれてくるのだろう。

お二人の作品からは、物への慈しみと作ることの限りない楽しみを教えられる。

佐紀子さんの作品／ホックのお雛さま
恵一さん佐紀子さん共作

❶大門川

なぜか鯉がいっぱい。

❷鷲巣染物店

のぼり、のれん、印物、お祭りのはっぴ等を染める鷲巣染物店だが、店主の鷲巣正司さんは、筒書きの作品も作っている。

筒書きとは、フリーハンドで絵を描き、その部分に防染のりをおいて染まらないようにして絵柄をつけていくもので、難しく、後継者が少なくなってしまった。「伝統を守ったものと伝統を現代的にアレンジしたものを作りたい。伝統工芸の技術は、現代の先進技術に通じるものがいっぱい」だと言う。

❸蒔絵師 矢沢賢一さん

古くから様々な文化が入ってきた羽鳥には戦後、田町・茶町・新富町等の職人さんたちが移住し、職人の文化が安倍川を越えてやってきた。

蒔絵師の矢沢賢一さんもその一人で、30年程前に羽鳥へ移り住んだそうだ。

蒔絵はその字のとおり、漆塗りをした上に細い竹筒から竹の先についた網を通して金粉を“蒔いて”絵を描くのが基本。その金粉の部分を削ったり、真綿で金粉をなすりつけて描いたり、また、螺鈿(らでん)(真珠色の貝殻の薄片をはめこんだ部分)には貝殻の薄片の中でも青くていい色の部分を選び、数ミリのものを1つずつ置いていく細かくて根気のいる作業だ。温暖な静岡をはじめとする太平洋側の地域では、1つの仕事をじっくりやるよりも効率のよい仕事が多種あり、蒔絵を商売として成り立たせることは難しくなってしまったが、矢沢さんは現在も作品を作り続けている。

矢沢さんの作品は、花鳥風月を題材にすることの多い蒔絵には珍しく、流木を描いたものや、東京の埋立地を描いた「13号埋立地」と題する作品がある。「詩を感じさせるものを…」と言う矢沢さんの言葉どおり、漆黒の地に描かれた蒔絵は、静かな品と少し枯れた風情が人生や人の感情を感じさせる。

羽鳥には、矢沢さんのように職人の魂を引き継いだ「漆塗りや鎌倉彫などの隠れた名人がたくさんいる」という。

矢沢賢一さん作品
「13号埋立地」→

❹大八車

「日本は物を捨ててきた国、昭和初期の物も残っていない。物がなくなると、その言葉もなくなってしまう。」

羽鳥在住の家具職人藪崎春秀さんは、そんな思いから江戸、明治時代に使われていた物を探し、その中から家具職人の技術を生かして常夜燈やしょいこ、そして大八車を造った。どれも今では時代劇の中でしか見ることができなくなってしまったが、藪崎さんの常夜燈や大八車は驚くほど細かく再現され、こと大八車の木製車輪は、美しい程完璧な円に造られ、思わず見とれてしまう。使い心地もなかなかスムースで、木のぬくもりも心地よい。「改めて昔の人の知恵や工夫を発見した」と言う藪崎さん。大八車には明治後期のものを修復した物や、飾っておける小さな物もある。「実際にさわって使ってみないと分からない」ので藪崎さんの工場(牧ヶ谷)へ連絡すれば、使ってみることもできるとのことだ。

さて、藪崎さんはこの夏から絵を描き始めた。絵を描くことによって更に物の細かい部分を発見したり、物の見方が少し変わった。今は絵を書きながら、次回作のテーマを探している。(注文家具ヤブサキ☎054−278−5509)

❺洋菓子ベルン

地元の人たちが皆「おいしい」と口をそろえる手作りお菓子のお店「洋菓子ベルン」。人気のロールケーキは種類が豊富、しっとりしたスポンジは柔らかいだけでなく、食べ応えもある。色とりどりのショートケーキにも心魅かれる。

❻人形の月志

❼建穂神社

❽建穂観音堂

建穂寺は、白鳳年間(645〜669)に道昭法師によって開かれた真言宗の古寺で、鎌倉・室町時代には久能寺と並んで駿府文化の中心となった。浅間神社に伝わる廿日会祭の稚児舞は、徳川家康公の命によりこの寺の舞楽を奉納したものだといわれる。

もともとこの寺は神仏混淆であったが、明治時代の神仏分離に続く廃仏毀釈によって多くの院坊も壊され、更には火災によってほとんどが消失してしまい、今では観音堂が残るのみとなってしまった。

現在、観音堂は建穂の町内会で管理しており、門の前には管理先の電話番号が記されているので、いつでも中を見学できる。管理の方にお願いして観音堂を開けてもらうと、中にはご本尊の千手観音菩薩像をはじめ弘法大師像、不動明王像など時代を感じさせる立派な仏像や建穂寺を庇護した徳川家代々の位牌も並び驚かされるが、これらは廃仏毀釈の折、村人たちが助け出し、観音堂も村人たちによって建てられたものだという。

建穂の町には、観音堂へ向かう道を観音通り、もと建穂寺の鎮守であった建穂神社に向かう道を宮前通りと示した手作りの看板があり、この寺社が建穂の人達に親しまれ、大切にされていることが伺える。観音堂横の土俵では、子供たちの相撲大会も行われているそうだ。

❾ホワイトラーメン

羽鳥交番の向かいにあるラーメン屋さん。テレビ静岡の「くさデカ」でも紹介されたというこだわりのお店。餃子の皮は、なんとフランスパンの生地からできている。中の具も31種類の食材からできており、酸化を防ぐ特殊な方法で焼かれた餃子の「モチモチ」感はちょっと他では味わえない。ラーメンのスープも電子水を使うなど、あっさり&ヘルシー。店内は明るく清潔感にあふれ、女性客にも人気だ。

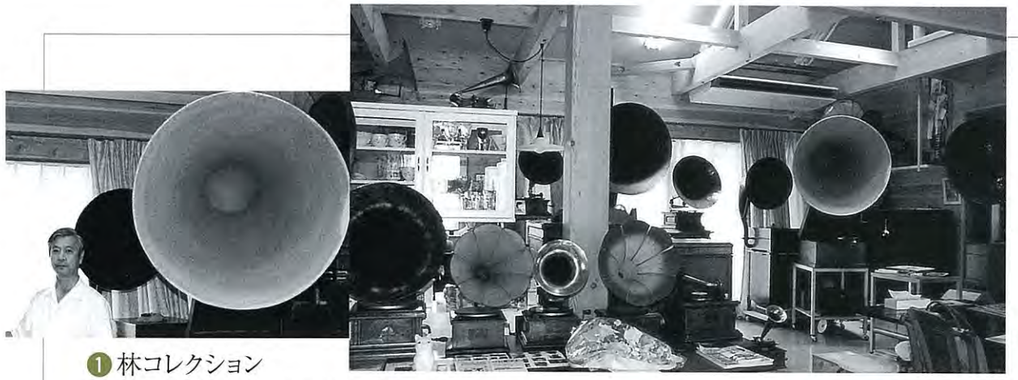
羽鳥の秘密①

「羽鳥」何かやさしい物語を感じさせるこの地名は「機織(はたおり)」の転化、又は、「服織(はとり)」から生じたものといわれる。この地名の秘密について語るには、まずは古墳時代末期の静岡から始めなくてはならない。

古墳時代末期、有度山を中心とした海よりの文化と賤機山を中心とした山よりの文化があり、この二つの文化圏の人々は互いの産物を持ち寄って交換しあっていた。その場所がいつしか市場として栄え、町ができ、新しい文化の中心となった。これが「阿倍の市(いち)」と呼ばれるもので、静岡市のルーツでもある。

さて、羽鳥は、山よりの文化圏に属し、賤機・麻機とならび織物の産地で、綾や絹を多く阿倍の市に送り、富裕だったらしい。

伝承によると羽鳥から少し山よりにあった建穂寺は、あの聖徳太子の側近であった帰化人秦(はた)氏の率いた服部(はとり)が住んでいた所といわれ、彼らは養蚕機織に従事していたという。また、建穂寺が養蚕の守護神「馬鳴(めみょう)大菩薩」をお祀りした寺であることからも羽鳥がまさに機織・服織の里であったことをうかがわせ興味深い。



❶ 林コレクション

蓄音機というと「ザーザー」という雑音交じりの音を思い浮かべてしまう人も多いのでは…。林さんが所有する蓄音機の音色を一度聴いてみれば、そのイメージは一掃されてしまう。臨場感ある本物の音が、そこからは流れてくる。

もともとオーディオマニアだった林さんだが、加工されたデジタルサウンドでは味わえない蓄音機の音に惹かれ収集を始めた。良い環境の中で音を鳴らしたいと、今年3月に大阪から奥様の実家がある羽鳥へ引っ越してきた。木に囲まれたホールには、約200台所有する蓄音機のうち60台程が展示されている。蓄音機の生みの親であるエジソンが初めて作った蓄音機のレプリカを始め、約100年前の蓄音機など、貴重な名機が並ぶ。直径93cmの迫力ある蓄音機もあり、まるでそこは博物館のようだ。すごいのは、それらが全て「現役」であること。部品も数多く所有し、全て自分で修理している。まるでコンサート会場にいるような臨場感あふれるやさしい音色は、蓄音機が決して骨董品やインテリアではないことを物語っている。

「将来は博物館を造って、多くの人に蓄音機から流れる音を知ってほしい」と林さん。現在も自宅ホールでのコンサートや出張コンサートを行うなど、蓄音機の魅力を伝えている。

❷ コイン精米

お金を入れてお米を精米する機械
田畑の多い羽鳥ならでは。

❸ 藁科公民館

❹ 中勘助の詩碑

中勘助夫妻の羽鳥での生活を物心両面から援助した豪農石上家に残る。中勘助の直筆と言われている。

❺ 旧服織小学校跡

現在は広場になっている。

❻ 石上用水

羽鳥村上を出発点に、大柳・別荘前・久住谷川を渡り、建穂観音堂前に至る。その長さは2,000メートルにもなり、通称大堀とも呼ばれている。この用水路は1750年頃、羽鳥村の名主石上藤兵衛長隣（ふじひょうえながちか）が開いたもの。藤兵衛長隣は、この用水路の他、藁科川に堤防を築いたり、天明の飢饉の折には、私財を投げ出し、農民を救うなどの大事業を行った。羽鳥の浅間神社には藤兵衛長隣の碑がある。

❼ 中勘助文学記念館

小説『銀の匙』や詩『風のごとし』で有名な中勘助は昭和18年から病気療養のため新間や羽鳥に滞在した。新間では、前田家の離れを借りて住んでいたが、この時住んだかやぶきの離れと母屋を復元修復したのが、「中勘助文学記念館」である。

記念館展示室には、勘助の原稿や手紙、帽子・トランク・万年筆等の遺品の他、小説『銀の匙』に登場する銀の匙が展示され、また、勘助が杓子菜（おたま菜）の盛りに「杓子庵（しゃくしあん）」と名付けたかやぶきの離れには、生前使用した文机や火鉢などが並べられている。

中勘助は、この土地の穏やかな自然を愛し、そにに住む人々との素朴なふれあいを喜び、その生活を随筆『樟ケ谷』・『羽鳥』や詩集『藁科』に綴った。また、服織中学校の校歌は勘助の作詩であり、羽鳥で身を寄せた石上家の史子婦人へ送った手紙には羽鳥を懐かしみ、次のような歌を記している。

杓子庵

銀の匙

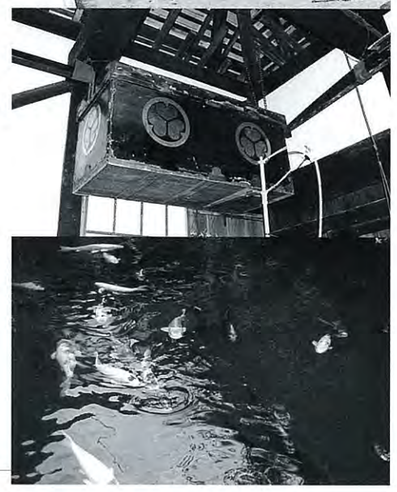
冬衣はとりをもえばわらしなの
篠ふく風も恋しきものを
わらしなの川の堤のたち柳
われたち寄らば靡（なび）きこんかも

中勘助の帽子・トランク・下駄

❽ 見性寺

寛仁元年(1017)、真言宗の寺として創建され、大永元年(1512)今川家臣の朝比奈弥一郎の開基により禅門の曹洞宗に改められ、現在に至っている。

お寺の一室には、古くから寺に伝わる仏像、掛け軸等が保存され、拝見することもできる。庭には大きな釣り鐘があり、山からの自然水が流れ込む池には長さ1メートル、百年以上生きているという鯉が悠々と泳いでいる。



池には鯉がいっぱい
中には1m以上のものも。

羽鳥の秘密（ろまん）②

現在の羽鳥は、市街地から少し離れ、藁科街道を車で5分も走ると山々に囲まれた田園が見えるのどかな土地だ。ここには、雅びな秘密がある。

羽鳥を中心とした藁科川流域には、平安末期から鎌倉時代にかけて「服織荘」と呼ばれる荘園があった。

この服織荘は、なんと皇室支配の荘園で鳥羽天皇の皇女八条院が父天皇から譲られたものであったというから、都の人々もこの地を訪れ、永住した者もあったのであろうか。

羽鳥に住む古老の話では、現在も羽鳥とその周辺の人達の話言葉には、都言葉のイントネーションが残っているという。

ちなみに、羽鳥は「十六夜日記」に登場し、「枕草子」には木枯の森が登場しているのは、有名な話である。

❶ 極楽寺

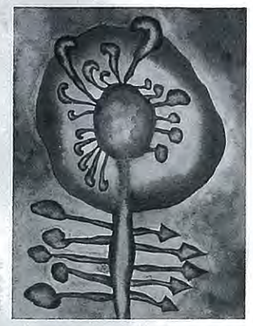
❸とうけんさん（洞慶院）

「とうけんさん」の名で親しまれている洞慶院は、藁科街道から久住谷川沿いに入った杉の木立の中にたたずむ。1452年、右叟円柱和尚によって建立された当寺は、早春には梅園、秋には紅葉で人々の目を楽しませてくれる。曹洞宗の高祖・道元禅師が梅の花をこよなく愛したことから、代々の住職が梅を植え続け、今では古株が千を超えるまでになった。3月上旬の見頃の時期には、山間のこの寺を梅の香が包む。

毎年7月19日、20日の両日には、久住山を開いて当寺が建立されたことを祝う開山忌が開催される。感謝の意とともに檀家の無病息災、家内安全等の祈祷が行われ、参道にはたくさんの夜店も出てたいへんな賑わいを見せる。この祭りの名物として、とてもへんてこな形をした「おかんじゃけ」という魔除けの作り物が売られることでも有名だ。

また、当寺には手水の明王としてウスマンサンが祀られている。和式のお手洗をまたぎながら呪文を唱えると「下」の悩みから救われるご利益があるとか…。開山忌の参詣者は必ずウスマンサンに詣でるというが、戦後間もない頃には、夜中、仕事を終えた花街の人々が人力車でやってきたという。

境内の各所に南天の木が植えられている。この中から七葉になっているものを見つけ、髪にさして帰ると良いことがあるとか…。「とうけんさん」はなかなか奥が深い。



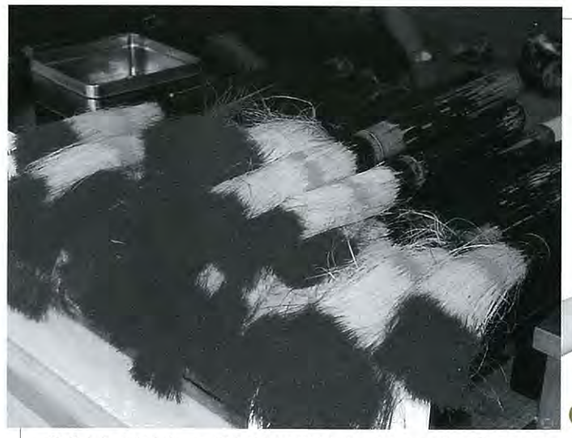
❷小畑桂子さん

「衝動癖」とご自分のことを言う。何かを直観するとすぐに行動に移してしまうのだそうだ。

例えば、雑誌『フィガロ』に掲載されたスペインの建築に魅せられ、スペインへ行き、演劇祭が見たくてフランスへ行く。そして、大道芸のスタッフ募集の広告に、これだ!とひらめいて即応募。以来ずっと大道芸のスタッフを続け、惚れ込んだ芸人さんを海外まで追いかけた。大道芸の魅力を、「世界中の空気が感じられ、日常とは違う、イメージの広がる世界へ連れていってくれる」と小畑さんは話すが、彼女自身がいろんな風を受けて、パワフルというよりは軽やかにイメージの広がる世界を旅しているようだ。

さて、そんな小畑さんは、昨年、初めての個展を開いた。繊細な色使いがされた不思議な水彩画は、「テーマを考えるのではなく、ふっと湧いてきたり、思いついたものを描く自分の心象画又は空想画」だと言う。小畑さんらしい、心のおもむくままに描かれた作品は、作者の心の内を垣間見せ、観る人にいろいろなイメージを広げさせてくれる。現在、「次回個展に向けて準備中」。小畑さんは、元気な笑顔で話してくれた。

小畑桂子さん



❹おかんじゃけ

若竹から毛が生えてるような奇妙な形をしたおもちゃ。これが「とうけんさんのお祭り」で売られている「おかんじゃけ」だ。昔は全国各地で作られ、その種類は約30にも及んだという。その土地ごとに呼び名も由来も異なり、土俗的な特徴をみせていた。しかし現在では、全国的にみても、この羽鳥で唯一作られているだけであり、皆総出で作ったおかんじゃけも、今では正式な作り手は二人だけとなってしまった。

おかんじゃけは、若竹を二節の長さに切り、一節を残し、もう一節を毛のように細かく割いて作る。この毛のような部分は、竹を金槌や石でたたき潰して繊維の部分を糸状にし、米のとぎ汁に一晩さらした後乾燥させて作る。乾いたら、最後に僧侶の袈裟の色を表す赤、黄、紫の色を付けて出来上がるというわけだ。きれいな糸状にするためには、材料である竹を採る時期がポイントとなる。一年のうち、6月下旬～7月上旬の4～5日間に採らなければ、きれいな糸状にはならない。お祭りまでの2週間で150本程のおかんじゃけを作るのだが、竹取りの時期を見計らうのが一番難しいという。

本来、おかんじゃけはおもちゃだったので、毛のような部分を桃割や島田まげに結って遊んだり、陣取り合戦の采配や相撲の軍配にして遊んだりしていた。

おかんじゃけを作る時期が、たまたま洞慶院のお祭りの時期と一致し縁日で売られるようになったことから、「おとうけんさんの縁日でおかんじゃけを買えば夏に病気をしない」と、一種の魔除けのような縁起がつけられたのだという。

❺屯田兵の家

洞慶院梅園の少し手前を南に、久住谷川を渡り、山に向かって歩くと緑の中にまさぶき屋根の家が現れる。

この家は明治時代、未開の原野だった北海道を厳しい自然と戦いながら防衛開拓した「屯田兵の家」を復元したものだ。復元した山下勉さんは祖母が屯田兵の家族として渡道した屯田兵の子孫。自身のルーツを求めて屯田兵について調べ始め、たまたま建物の見取り図を手に入れたことから、平成11年に初めて復元公開した。以来、毎年、洞慶院の梅が咲く2月の土曜・日曜を選び、4日間の公開をしている。囲炉裏を中心に土間と畳の部屋が2つ、昔なつかしいランプや糸巻が置かれ、木のぬくもりを感じさせる家の中には、開拓の歴史やアイヌの文化とともに清水市三保出身の屯田兵13名についての展示もされ、思いもよらない歴史を知ることができる。公開中には、アイヌ料理をふるまったり、落語家・林家とんでん平の手話落語やアイヌ文化についての講演等様々な催しを企画してきた山下さんだが、この夏は、北海道全212市町村を紹介する「北海道百貨展」を藁科公民館で行った。これは、212市町村すべてに資料を請求し、集まった市町村誌、観光ガイド、特産品等を展示、各市町村の特色を一挙に紹介する熱の入った催しとなった。「来年の2月は、明治政府の政治犯を集めた集治監やアイヌの彫刻、アイヌ料理を紹介したい」と語る山下さんは、今ややその思いを北海道全土に駆けめぐらせている。

羽鳥の秘密③

「緑豊かな田園を馬車が駈ける」かつて羽鳥では、こんな風景を見ることができた。

明治27年頃から昭和の初めの話で、山崎二丁目安倍川から富沢又は八幡まで、乗合馬車が6台程通っていた。馬車は発車時刻があるわけでもなく、お客が集まるまで待ち、5、6人の乗客が集まると出発した。途中に停留所はなく、乗るも降りるもお客の求めるままに止まっていたというから、何ともなごやかな、時間に追われることのない当時の人達の暮らしぶりがうかがえて微笑ましい。当時の子供たちは、馬車の後ろにつかまって乗り、馭者にムチでおどかされた思い出を皆持っているという。馬車は、年中行事の際には、馬がバテるほど何回も発車し、羽鳥ではなくてはならない乗り物であったが、昭和6年乗合自動車が運行されるようになり、徐々に姿を消してしまった。

❻屯田兵の家周辺の山並み

❼石上藤兵衛長隣の碑（浅間神社）

❽八幡神社

❾竜津寺

❿竜津寺へ向かう道

木枯の森

**藁科川の河原に浮かぶ小さな森。古から、人々は憩い、笑い、憂い…
様々な思いをこの森を舞台に語ってきた。**

森は木枯の森

徳川家康公が東海道を整備するまで、この木枯の森は東西の交通の要路に位置していた。旅人たちは藁科川の流れの中を歩いて渡り、この森で旅の疲れを癒したという。故郷を思い、これからの旅を憂いたのであろうか。人々は歌を詠み、文化を語り、この森は旅人たちのオアシスとして心身ともに拠り所となっていた。

かの有名な清少納言の『枕草子』の中でも木枯の森は登場する。
「森はうへきの森。岩田の森。木枯の森。」(207段)。

平安時代、京の都にも、この森の美しさは聞こえていた。それを裏付けるように、この森を歌枕にした和歌が数多く残っている。

こがらしの杜の梢のあさなあさな 名にあらわるる神無月かな	藤原定家『新古今集』
君こふと我こそ胸にこがらしの 森とはなしに影になりつつ	紀貫之の女撰
こがらしの森の下草風はやみ 人の嘆きは生ひそひにけり	『後撰集』の恋歌

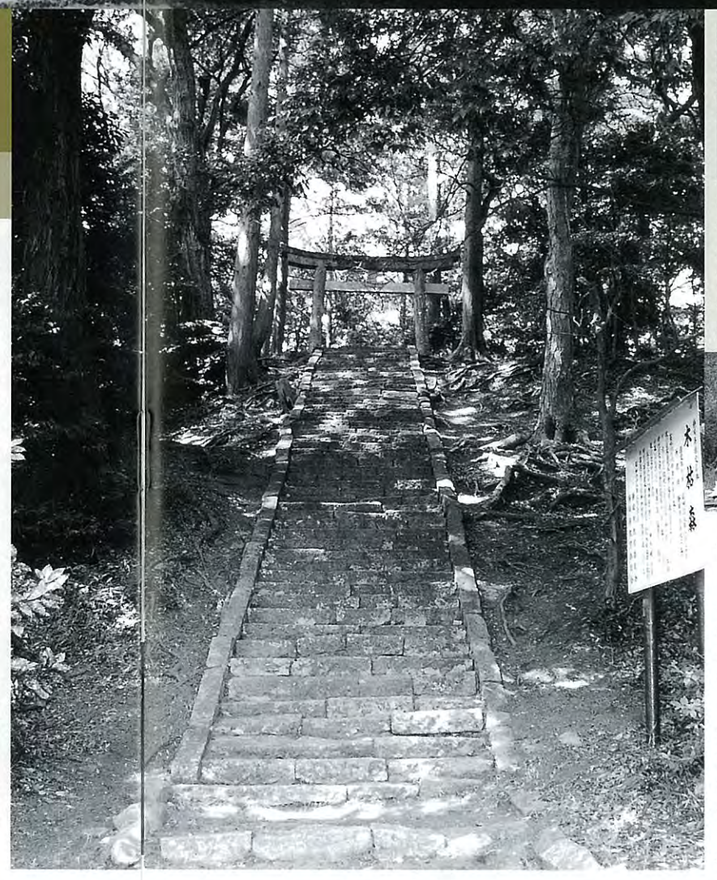
時代は下り、江戸時代になっても、人々にとって木枯の森は大変魅力的な場所であった。森の頂上に、国学者・本居宣長が建てた碑がある。1788年、羽鳥の名主石上長隣氏に持ちかけられ、313字の万葉仮名で綴られた碑を建設した。今も、その碑は木枯八幡宮の横にひっそりと建っている。

木枯の森の伝説

木枯の森より下流に「舟山」という森がある。この森も川中島になっている。大昔、上流の山から大天狗が舞い降りた。この時、最初に天狗がわらじの土を落とした所が木枯の森となり、2番目が舟山になったとか…。

また、昔、木枯の森は牧ヶ谷の山に連なったもので、島ではなかったという。川に突き出た半島のようになっていたが、度重なる水害をくい止めるために、長い間をかけて土を取り除き、陸から切り離して独立した森にしたのだという。

木枯の森にある木枯八幡宮の氏神様は、現在、東岸にある羽鳥地区の八幡神社に祀られている。この八幡神社ができる前、切り離された木枯の森が東岸の村に属するのか西岸に属するのか争いが絶えなかった。江戸時代の中期、東岸羽鳥地区に住む藤兵衛が、西岸の村人達に木枯の森の争奪戦を申し込んだ。大きな火箸を真っ赤に焼いて、それを長く握っていた方が勝ちというものである。誰一人として握ろうとする者はいなかったが、藤兵衛はこっそり手に塩を付けて握り、勝ったと言われている。それ以来木枯の森は東岸地区に属し、後に八幡神社も羽鳥に建立されたそうだ。



木枯八幡宮のお里帰り

森の頂上にある木枯八幡宮には、いつもは氏神様は祀られていない。江戸時代、川の中にあるとお参りがしにくいということで、東岸の羽鳥地区に新しい八幡神社が建てられ、氏神様もそこへ移された。年に一度だけ、氏神様に在所にお帰りいただこうと、成人になった男衆がおみこしをかついで川を渡り、森の木枯八幡宮まで行くという行事が行われている。毎年9月15日、白ふんどし姿の男衆が羽鳥の八幡神社を出発し、掛け声とともに木枯の森までおみこしをかついで練り歩く。川を渡る姿は勇壮で、昔この地区では、この行事に参加することが「男の勲章」であったという。最近、若い男性の参加者が減り、成人になった若者だけがかつぐということもなくなってしまった。たった1日だけでも元々祀られていた場所に帰っていただこうという羽鳥の人々の心遣いがうかがえるお祭りである。

杉や檜がこんもりと生い茂り、どこからともなく鳥のさえずりが聞こえてくる。頂上の木枯八幡宮へと続く石段を一歩一歩上がっていく。ちょっと息を切らしながら、木漏れ日の中にたたずむ。「いつの時代?」まるで平安の時代から時が止まってしまったような錯覚に陥ってしまった。木枯の森に来たのは、小学校の遠足以来だ。今日もどこかの保育園の子供たちが水遊びに来ていた。もうすぐ行われる八幡神社のお祭りのため、地元の老人会の方達が藁科川に橋をかけてくれていた。普段は川の中を歩かないと木枯の森まではたどり着けない。そのせいか、木枯の森は昔のままの姿で残っている。

初秋だというのに、日差しが強く汗ばむほどの陽気だ。なのに、この森の中はひんやりと涼しい。木枯八幡宮の前に腰掛けていると、なぜか物悲しい気持ちになる。けれども、ここにずっといたいような…。古の人々もきっと同じ感覚だったのではないか。八幡神社のお祭りのために見回りに来たという地元の方にばったりあった。「木枯の森にはね、よく一人でポツンと来る人がいる。この前も若い女性が来ていたよ。なぜかねえ。」

一人で来ると何かわかる気がする。この森は人々を癒してくれる不思議な力がある、ずっと昔から、そしてこれからも…。

静岡市立児童会館

「ぼくはロボットのカンちゃんです。児童会館で楽しく遊んでいってください」と、昭和48年に導入された故手塚治虫氏デザインの案内ロボット「カンちゃん」は、今日も子どもたちに元気に呼びかけています。

静岡市立児童会館は、昭和32年に緑と小鳥の声に囲まれた駿府公園に建てられました。

現在、新施設の計画が進められる中、「青少年のための科学の祭典」や大型サイエンスショーなどの新しい取り組みにより、児童の科学に関する一層の情報発信基地を目指して活動しています。

4階建ての施設は、1階に科学展示物、2階はクラブ室、ホール等、3階は子どもギャラリー、屋上には天文台があります。週末には、科学工作、わくわく広場、サイエンスショー、星を見る会などたくさんの催し物を行っています。3階のギャラリーでは、各種の絵画展などで子どもたちの力作を鑑賞することができます。また、小学校などへ出かける教育支援プログラムなども行っています。

夢・遊び・驚き いっぱいの静岡市立児童会館へぜひお越しください。

特別企画展のお知らせ

ラ・ビレット展 イメージの世界

期間 10月20日(土)～11月11日(日)
休館日:10/22.10/29.11/5
時間 9:00～16:30(最終入場16:00まで)
内容 フランスにある科学産業都市「ラ・ビレット」からのメッセージです。ぜひ「来て、見て、確かめて」ください。

お問い合せ 〒420-0855静岡市駿府公園1番1号
Tel 054-252-6161 Fax 054-252-7087
E-mail:fjidou@mail.chabashira.co.jp
アクセス JR静岡駅から徒歩15分、静鉄新静岡駅から徒歩8分
開館時間 9:00～16:30
休館日 月曜日(休日にあたる場合は除く)、休日の翌日(日曜日にあたる場合を除く)、及び年末年始

静岡市民ギャラリー

静岡市役所新館が建設されたのを機に平成元年、本館が改修され、スペイン風ドームに象徴される異国情緒あふれる建物にふさわしく、本館1階に「静岡市民ギャラリー」が設けられました。

絵画、彫刻、書、工芸その他の美術を愛好する人たちに展示の場を提供するとともに、多くの市民の方々に芸術作品を鑑賞していただくことを目的とした施設で、大小5つの展示室を備えております。

静岡市の中心部にあり、市役所等への用事や買い物に来られた方が、気軽に立ち寄れるギャラリーとして多くの方に親しまれています。

毎月の展示案内は、市の文化施設、公民館、図書館等にチラシを配布するとともに、静岡市のホームページにも掲載していますので、ご利用ください。

〒420-0853静岡市追手町5番1号 Tel 054-221-1017
開館時間 10:00～18:00(入館は17:40まで)
休館日 月曜日(祝日の場合はその翌日)
年末年始(12/28～1/4)
利用申込方法 利用申込みは、希望日の6か月前から1か月前までです。複数の申込みがあったときは、抽選によって申請の順位を決定します。申込みは、市役所本館1階市民ギャラリー事務室に直接お出かけください。(電話での申込みはお断りしています。)
お問い合わせ Tel 054-221-1017

STREETいまどき縁日 FESTIVAL IN SHIZUOKA

まちがミュージアムみたい!

ストリートフェスティバル・イン・シズオカは、
ストリートで活躍するミュージシャンやアーティストを一堂に集め、
自由に音楽を演奏したり、アート作品を創作・発表する文化イベントです。
今年は会場・時間を拡大して開催!
さらにパワーアップしたイベントをお楽しみください。

11/17(土)・18(日)
11:00~20:00 11:00~18:00
会場:青葉イベント広場・青葉シンボルロード・七間町通り

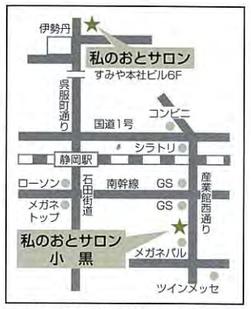
お問い合わせ:ストリートフェスティバル・イン・シズオカ実行委員会
〒420-0031静岡市呉服町2-1-1 札の辻ビル6階(財)静岡市文化振興財団内
Tel 054-255-4746 Fax 054-653-3501

暮らしのなかに音楽をとり入れてみませんか

すみや「シニアカルチャーミュージックスクール」

～音楽療法士による、今話題の中・高年向けの音楽教室～

参加者募集



※上図2会場にて実施中

キーボードを中心に、打楽器も取り入れてアンサンブルをします。
楽器ができなくても大丈夫!
リズムにのって体を動かし若返りを図りましょう。
対象は50歳以上の男女。

只今レッスン見学受付中

入会金 ¥5,250(税込)
月 謝 ¥3,675
(3ヶ月分¥11,025の前納制税込み)
■レッスン回数:月3回
■レッスン形態:グループレッスン
■レッスン時間:50分

お問合せ お申込み **私のおとサロン TEL 054(255)3443**

From Editor 編集後記

◆羽鳥というと「田園風景が広がる・・・」というイメージを持っていた私達。ところが、取材をしてみてビックリ!羽鳥地区の住人の方は奥が深い。仕事も遊びもプロ級で、驚きの連続でした。突然の取材にも親切に応じてくださった皆様、ありがとうございます。

◆皆様がお持ちの情報をもとに取材をしたいと思います。ご意見・ご感想・情報をドシドシお寄せください。

参考文献
●『はとり』
服織小学校創立100周年記念行事実行委員会
●『町名の由来』 飯塚伝太郎著
長倉智恵雄補筆 静岡新聞社
●『駿府の歴史』
静岡観光協会
●『熱砂の中のオアシス』
静岡市教育委員会社会教育課
静岡市立藁科図書館 編
(財)静岡市文化振興財団
●『藁科物語①～④』
静岡市立藁科図書館 編
●『南藁科とその周辺』
小野田護
●『幻の建穂寺』
建穂寺の歴史と文化を知る会
●『水と緑の里わらしな
静岡市合併30・15』
「静岡市合併30・15年記念」事業実行委員会
藁科地域振興協議会

静岡文化情報「街かど」第18号

●発行(年2回)
平成13年10月
●編集・発行
(財)静岡市文化振興財団
〒420-0031
静岡市呉服町二丁目1-1 札の辻ビル6階
TEL.054-255-4746/FAX.054-653-3501
E-mail:bunshin@chabashira.co.jp

●印刷
株式会社パピア中央
静岡市小鹿一丁目62番18号

水まわりのプロ集団

静岡市水道局指定工事店協同組合
千代田５丁目13-12
２４７-３１３１
静岡給排水修繕センター
２４８-７８１２

静岡けいりん

Go!Go!KEIRIN

開設49周年記念競輪

2/16㊏・17㊐・18㊊
23㊏・24㊐・25㊊

R100 古紙配合率100%の再生紙を使用しています。